



ゆり
揺

かご
籃

イロクオイ

北アメリカ東部

使用年代 1888年頃

長さ67.8cm、幅36.5cm

博物館と地域研究 「アイヌ文化の成立を考える」

日本の歴史・文化について、東京中心の思考から、あるいは東京以南の歴史・文化から発想されがちであるとする反省が最近高まりつつあるように思います。特に日本の基層文化を考えると、北方からの影響をどのようにとらえることができるのかという問題についてはまだ十分な説明がされているとはいいがたく、その点では北海道あるいは東北地方の博物館が果たすべき役割は大いにあるのではないのでしょうか。このような意義を込めながら、本フォーラムは北海道の中・近世における文化の変遷についてアイヌ文化の成立を中心に考えていこうと企画されたものです。

今回は考古学的な視点からの発表が中心になりましたが、東京大学の宇田川洋氏がその必要性を提唱され、率先して取組まれている「考古学の立場からみたアイヌ文化研究」に触発されたこともあってか、道内外から約70名の方々が参加され熱心な発表、討論が行われました。午前中に宇田川洋、西本豊弘両氏の講演、午後からは北海道内で調査研究をされている4氏の事例研究発表の後、当館の渡部、青柳の司会で総合討論を行いました。

特に話題がアイヌ文化の成立であることから、結果として、アイヌ文化とそれに先行する先史文化との関係、すなわち、擦文文化および擦文文化とはほぼ同じ時期にオホーツク海沿岸に広がっていたオホーツク文化、さらにオホーツク文化の後半期に北海道東部に現れた“トビニタイ文化”をめぐるアイヌ文化との系譜関係が議論の中心になりました（*“トビニタイ文化”は土器や竪穴住居に擦文、オホーツク両文化の特徴をあわせもち、やがて擦文文化に吸収されてオホーツク文化要素が消滅する）。以下にその概要を報告します。

〔講演〕

宇田川 洋 氏（東京大学）

「アイヌ自製品の成立を考える」

アイヌ文化の成立過程を考える上で“もの”の

もつ機能に着目し、本州方面から移入された「和産物」とアイヌ社会のなかでつくり出された「アイヌ自製品」を主題とする。アイヌ文化に先立つオホーツク文化の木製の器類、擦文文化の木製器類、曲物類、白樺樹皮製容器、繊維製品を概観し、とくに擦文文化の機織具にアイヌ文化にみられる祖印的な刻みがつけられていることに注目している。考古学の立場からアイヌ文化を考える要素として、渡辺仁氏が提唱した「クマ祭文化複合体」（同氏はさらに発展させた「アイヌ文化複合体」を考えている）においても重要な祭具とされる宝物としての和産物がある一方で、アイヌ自製品のなかにもクマ祭に欠かせない火皿、また、もともと移入品であったものが自製されるようになったキセルがある。そのほか自製品としてトリカブト毒を込める竹製の鎌あるいは鋸先があり、これら自製品の重要性を指摘したい。

西本 豊弘 氏（国立歴史民俗博物館）

「動物からみたアイヌ文化の成立

—クマ送りの起源を中心に—

アイヌのクマ送り儀礼の起源に関して、関連する文化とのつながりを考察した。従来、縄文時代以降、明確にクマ送り儀礼がみとめられるのはオホーツク文化のみであったが、羅臼町オタフク岩洞窟遺跡の発掘例から擦文文化にもクマ送り儀礼がみられることから、アイヌ文化に特有の「クマ送り」儀礼の起源は擦文文化にあるのではないかと考えられ、常に変化していた北海道の人びとの生活のなかで、アイヌ的生活様式はプロセス的にしか把握できない。あえてアイヌ文化を表現すれば、縄文時代以来の狩猟・漁撈伝統を残しつつ、擦文文化を基礎としてオホーツク文化の影響を受けた文化といえる。

〔事例研究発表〕

藪中 剛司 氏（アイヌ民族博物館）

「掘り出されたコタンーイルエカシ遺跡」

平取町の沙流川河岸段丘上にあるアイヌ文化期の集落遺跡、イルエカシ遺跡の調査結果について報告する。同遺跡は1987、88、91年の3カ年にわたって発掘調査され、その結果、21の建物址、1つの墓址、鍛冶址1を含む遺構やキセル、刀子、小札などの金属器や石器類などが出土した。この遺跡は1667年降下の火山灰層に覆われていることからこれら集落が営まれた時代がそれ以前と特定され、さらに建物遺構の長軸方向の変遷から3つの時期区分が想定され、それら時代区分についても、出土したキセル、陶磁器など本州方面からの移入品のなかには製作年代を限定して考えることのできる標識的遺物もあって、16世紀末以降とする年代が与えられている。柱穴からみた住居の付随施設には倉庫と考えられる遺構がみとめられるが、民族誌にみられる、入口小屋や幣棚、クマ飼育用の檻にともなう柱穴は認められていず、また動物遺体ではシカ骨が圧倒的に多く、クマ骨は1点のみであったなど、飼育クマ送り文化の起源を考える上でも興味深い結果が出された。

涌坂 周一 氏（羅臼町教育委員会）

「羅臼町オタフク岩洞窟における

クマ送り儀礼の痕跡」

羅臼町オタフク岩洞窟遺跡の発掘担当者として、西本氏が先にふれたクマ頭骨集積遺構を分析し、クマ送り儀礼の系譜関係を論じる。オタフク岩洞窟遺跡は続縄文期からアイヌ文化期にわたる3mにおよぶ遺物包含層からなり、このなかから13個体のクマ頭骨からなるクマ送り儀礼遺構が発見された。この遺構の年代は、層位関係やおもな伴出土器から擦文文化終末期と推定された。このクマ送り事例が住居外であることや雌雄による頭蓋骨の穿孔位置の違いがみられること、また幼獣が含

宇田川氏



西本氏



まれないことなどからオホーツク文化のクマ送り儀礼とはあきらかに異なるものであるが、系譜関係についてはオホーツク文化からの影響が考えられる。遺跡の位置から、当洞窟がクマ狩猟にともなう一時的なキャンプサイトとして利用されたことも想定される。

越田 賢一郎 氏（北海道埋蔵文化財センター）

「鍋と玉」

生活に密着した煮炊具としての鉄鍋と精神文化にかかわるものとしての玉の出現動向から北海道の近世における文化のありかたを考察した。鉄鍋の出現と擦文土器の消滅、さらに鉄鍋の不足を補うために再び土製の鍋が出現する変遷を煮炊具の変遷、鉄鍋の系譜、囲炉裏と竈の関係などから考証した。さらに本州に比べ北海道で鉄鍋の発掘事例の多い要因は、本州では鉄鍋がリサイクルされるのに対し、アイヌでは鍋も“もの”送り儀礼の対象であったことに求められる。

北海道における玉類は本州の出現動向と異なり、北海道独特の様相がみられ、続縄文期には琥珀玉分布圏を形成する。さらに本州では時代が下ると装飾品として玉類がかえりみられなくなるが、北海道では近世まで玉に大きな価値をみだしていることがうかがえる。

松田 猛 氏（釧路市埋蔵文化財調査センター）

「擦文時代以降の織物について」

アイヌ文化に特徴的なものとして植物繊維の織物、編物が知られているが、アイヌ文化期の遺跡

から繊維製品が出土した例は限られた事例が知られていたのみである。釧路市北斗遺跡の擦文文化期の竪穴住居内より出土した炭化繊維製品および道内における繊維製品の出土状況から、北海道への機織技術の導入は擦文文化期以降である。また従来、機織の前提として糸を紡ぐこと、すなわち紡錘車の存在が大きいとみられていたが、紡錘具をあまり用いなかったアイヌの機織技術を考慮すると、紡錘車の存在が必ずしも機織の存在を決定するものではないのではないか。

〔総合討論〕

以上の発表をもとに総合討論が行われ、おもな論点として、①アイヌ文化とは何か、アイヌ文化を規定するものについて、②クマ送り儀礼の系譜、③移入品、自製品のもつ意味について、議論が行われた。

アイヌ文化とは

最初に「アイヌ文化とは」という、本フォーラムの結論ともいえるべき問題について議論された。このなかで、最近ようやくアイヌ文化が考古学的に調査されはじめて、新しい事例が少しずつ知られるようになってきた状況のなかでは、結論は急ぐべきではないと付言された宇田川氏の発言は、「考古学からみたアイヌ文化」研究の現状を示すものといえようが、今後の指針となる多くの意見が出された。

講師、事例発表者側からは、「アイヌ文化とは一言でくれるものではなく、変容しながら歴史のなかにみられる事象の総体」といった発言に代表されるように、慎重な意見が多かったものの、クマ祭が重要な要素であるとする点では一致していた。

この点について会場からも興味深い発言があった。北海道東海大学の岡田淳子氏からは「続縄文期の後に土師器が北海道に流入し、擦文文化に移行するが、それはいわば大量生産的な要素である。

ところがある時期から方向が変わり、手作りの文化へ、つまり丁寧な文化へと変化する。この丁寧な文化こそがアイヌ文化にみられる本質的要素であり、擦文期に現れた手作りへの変化はアイヌ文化への導入ととらえることができるのではないかと、新たな視点にたった見解をいただいた。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館の米田秀喜氏は、「アイヌ文化」はアイヌの人たちが担ってきた精神文化、物質文化であるとしかねないのではないかとした。それらはたえず変容のなかにある、固定したものでアイヌ文化を考えるのは難しく、また“もの”を時代の指標として考えることには無理がある。つまり考古学では擦文文化期を土器で規定しているが“アイヌ文化期”は何をもって指標にしているのかあいまいなままであると述べられた。今後の大きな課題であろう。

クマ送り儀礼の諸問題

西本、涌坂両氏がとりあげた羅臼町オタフク岩洞窟遺跡のクマ送り儀礼遺構をめぐる、クマ送り儀礼の系譜について活発な議論が展開された。従来、考古学的な事例からみれば、クマ送り儀礼に関しては、住居内でのクマ頭骨儀礼がみとめられるオホーツク文化期と、クマ祭を行い共同の幣場をもつ近世アイヌ期の間に大きな空白があった。このことについて涌坂氏はオタフク岩の事例が層位関係、伴出土器から擦文文化終末期にあたり、この系譜関係についてはオホーツク文化からトビニタイ文化を経由してきたとすれば説明しやすいと述べられ、西本氏もこの系譜関係については同様の見解を述べられた。これに対し、広くみられるアイヌ期のクマ祭を考えると、オホーツク文化にその起源を求めるのではなく、擦文文化に求めてもよいとする見解もよせられた。さらにオタフク岩でクマ送り儀礼を行った人たちが、従来の編年にしたがってすんなり擦文文化終末期と考えることができるのかどうかについて、多くの意見や可能性に関する発言があった。早稲田大学

の菊池徹夫氏は擦文文化終末期の土器が伴出したという事実とは区別して、このクマ送りがオホーツク文化から受け継いだものか、“トビニタイ的”人たちがはじめたものなのかを考えるべきであると提唱された。斜里町立知床博物館の金盛典氏は文化段階を問題にされた。斜里町における発掘事例からみると、トビニタイ文化についての変遷過程が単純な流れではとらえられないものがあり、全体としてみると擦文文化にオホーツク文化が溶け込んでいく様相を呈する。しかし、個々の事例ではいくつかの段階が考えられ、トビニタイ式土器と擦文式土器が共に出土する場合もあり、“純粹”の擦文文化からオホーツク文化の要素を多く取り入れたものまでみられる。オホーツク文化を取り込んだ段階の擦文的段階を擦文文化とみなしてよいか問題であるし、オタフク岩の場合もこの段階の“擦文”であれば、北海道全体へのクマ送りの拡大をどう説明するかという問題は別として、オホーツク文化のクマ送りが擦文文化に入っていく過程が説明できる、と述べられた。

また、西本氏は奥尻島青苗貝塚のニホンアシカの送り儀礼の調査から擦文文化期にも動物送り儀礼がみられ、さらに骨角器にも全道的な均一性がみられることを指摘した。菊池氏はオタフク岩のような共同の送り儀礼については、事例がもう少し出なければなんとも言えないが…としながらも、現時点ではオホーツク文化に起源を求める方が理解しやすいとし、オホーツク文化にみられる住居内の骨塚が住居様式の変化に伴いだんだん外へ出たと考えていることからすると、最初から共同のクマ送り儀礼があるとすれば全く違う系統を考えなければならないとしている。

イルエカシ遺跡をめぐって

千歳市のユカンボシC2遺跡とともにイルエカシ遺跡は数少ないアイヌ期の集落址の発掘事例であり、柱穴からみて建物構造あるいは付随施設の在り方が民族誌にみられる様相と異なることなど

があいついで指摘された。とくに幣場の在り方について、宇田川氏は古い時代には幣場は集落共同のもので、集落とは離れた場所にあることから、イルエカシについても未発掘の場所にある可能性を示唆された。

移入品に対する依存

アイヌ文化における移入品への依存の在り方がとりあげられた。越田氏は食器全般の問題としてすり石、砥石があり、移入品と自製品との関連のなかで石器についても考える必要があると指摘した。また、イルエカシの鍛冶跡にみられた鍋の破片についてはリサイクルを考える必要があるが、アイヌ文化の“もの”送りからすると説明が難しいように、移入品が北海道でどう受け入れられたか考える必要を強調され、松田氏も鉄器や木製品がもつ意味を検証していく必要性を指摘された。

宇田川氏はアイヌ文化を規定する一つの側面で



ある“もの”の大半が外のものに依存していることについて、どうしてそうなのかは答えようがないとしながらも、希少なものを手にいれることの意味について触れられた。

このように熱心な議論が展開されたことにつきまして、講師、事例発表者ならびに参加者の方々に深く感謝申し上げます。今回のフォーラムをふまえ、次回も興味あるテーマを検討しております。

(学芸課 渡部 裕)

○平成5年度第5回講習会

とんぼ玉を語る・とんぼ玉を作る

講師／ジュウリーデザイナー 木村 正道 氏

宇都宮市にお住まいの木村氏を講師に迎え、「とんぼ玉」に関する講習会を1月16日に開きました。講師は宝石のデザインをしているなかでガラス玉に出会い、その魅力にとりつかれたといいます。最近ではとんぼ玉の個展を開いたり、全国各地の展覧会に出品するとともに、「とんぼ玉倶楽部」という愛好会を主宰し、その会報でさまざまな話題を取り上げています。講習会では、世界各地にみられるとんぼ玉の歴史や人びとのかかわりをご紹介します。実際につくり方をご披露くださいました。以下に概要を紹介します。

「とんぼ玉」とは、模様のついた直径3mmから10cmほどのガラス製の玉のことで、ひもを通す穴がついている。その歴史は古く、紀元前18世紀頃のメソポタミアにおいて、すでにガラス製造法に関する秘伝書が作られており、その数世紀あとはガラス玉が存在していたといわれる。

日本には3～4世紀にシルクロードを経由し、西アジアやエジプトで作られたとんぼ玉がもたらされた。

アイヌの女性が身につける「タマサイ」や「シトキ」は、交易によって手に入れたとんぼ玉などを首飾りとしてつけたものである。特に「シトキ」は中央の丸い金属が太陽を、玉が人間のからだの部分を象徴しており、装飾品として以上に精神的な意味合いを持っているという。

最近の考古学調査では、大阪・阿武山古墳の藤原鎌足(614-669年)の棺から、8mの銀線に大小のとんぼ玉をつなげて作った玉枕たままくらが副葬品として見つかった。また、藤ノ木古墳、吉野ヶ里遺跡においてもとんぼ玉が発見されている。

一方、近世のヨーロッパにおいてはアフリカとの貿易品として、とんぼ玉が盛んに作られるようになった。特にヴェネチアで作られたいわゆる「ヴェネチア玉」の美しさは、アフリカ先住民の人びとを魅了し、彼らの間に急速に広まった。現



代でも、アフリカのタンザニアに住むマサイ族、ケニアのサンプル族などでは財産や権力の象徴とされている。

このように古代から現代に至るまで、人びとはとんぼ玉を大変珍重していたとともに、それには人を引きつける求心力のようなものが備わっていたのではないと思われる。

〈とんぼ玉づくり〉

道具 プンゼンバーナー、プロパンガス

材料 ガラス棒

すでに着色されているものが市販されている。これを溶かして球状にし「とんぼ玉」を作る。

鉄の芯棒

溶かしたガラスを巻きつける。ガラスを冷却後、この棒を抜くとひもを通す穴になる。

離型剤

鉄の芯棒に塗り、ガラスを棒から抜け易くする溶剤

雲母

鉄の芯棒についたとんぼ玉をこの中に入れ、冷却する。直径1cm程度のものでは、30分ほど要する。

講習会では、直径1cmほどの玉を4個作っていただきました。玉を冷やす時間を利用して、とんぼ玉の歴史とその製作の過程を紹介したビデオを上映しました。講習終了後も、「家でやってみるにはどうしたらいいか」などの質問が数多く寄せられていました。

○平成5年度第3回講座

海獣狩猟文化について

講師／渡部 裕（当館学芸課長）

12月19日（日）には「海獣狩猟文化について」と題し、特に北太平洋地域のイヌイト、アリュート、北西海岸インディアン、シベリア・沿海州の諸民族、アイヌの各民族にみられた具体的な技術や利用方法を紹介しました。以下に要旨をご紹介します。

極北、亜極北地域の海には大型の海獣類が数多く生息しています。海獣狩猟の対象となったのは、クジラ類、イッカク、シロイルカ、アザラシ類、セイウチ、オットセイなどでした。また、例えば同じクジラ類でも、性質がおとなしいもの、海岸の近くを泳ぐもの、死んでから沈まないものが対象にされました。また、沈んでしまうナガスクジラの鯨には浮きを使うなどの工夫がなされました。

北太平洋とベーリング海における主な捕鯨方法には、「網」を使う方法、「毒—槍」^{（りゅう）}、「鉛—鉛網—浮き」を使う方法があります。

アザラシ鯨にもさまざまな方法があります。

アザラシの呼吸穴鯨でたいせつなのは、アザラシが呼吸をする穴の状態をさぐり、浮上してくるのを察知することです。

おとり、あるいはカモフラージュによるアザラシ狩猟では氷の上にいるアザラシにいかにして人間が近づいていくかが問題になります。白い服をきたり、アザラシの鳴き声をまねたりして近づいていきます。ベーリング海からバローにかけてはアザラシ誘引具（アザラシが爪で氷をかくのに似た音をだす道具：前号を参照）を用います。

浮鉛はアザラシを対象としたもので、ニブフが特にすぐれた技術をもっていました。

このようにして、捕えられた海獣は衣食住など生活の全般において利用されました。

欧米からの捕鯨船の到来によって、鉛の型式に影響をうけるなどの一方で、クジラやセイウチの乱獲により資源が減少しました。また、毛皮交易の需要からラッコやオットセイが狩猟の重要な対象になっていきました。

'94年4～5月の行事

「新収蔵資料展」4月26日（火）～5月17日（火）

開館後に収集し、常設展示していない資料のうち、平成3・4年度の収蔵分を公開します。観覧料は無料です。

主な資料：サミの衣類、ウイльта及びサハリン・アイヌのお守り・木偶、北米東部森林地帯インディアンの楽器、アラスカ・イヌイトの衣類等

*平成3年度収蔵の資料については当「北方民族博物館だより第5号」でも紹介しています。

期間中の休館日：4/29、5/2、6、9～11、16

展示されている揺籃^{ゆりかご}は、ふだんイメージする「子ども用ベッド」としての揺籃とは、ほど遠い感じがしますが、利用方法などについて教えてください。



表紙と同じタイプのゆりかごの使用法

A 展示している8民族の揺籃は、形はそれぞれ異なりますが、乳幼児を布や毛皮などでくるんで縛りつけて用います。自分の動きを制御できない子どもをくくりつけ、おとなしく眠らせるためです。

北方民族の揺籃は軽くて持ち運ぶのに便利で、ユーラシア大陸のトナカイ飼育民ではトナカイの背につけたり、北アメリカのインディアンでは表紙のように人間が背負う「しよいこ」型をしています。狩猟や放牧をしながら、移動生活をする人びとの知恵です。大部分は吊り下げられるようになっていて、家の中でも屋外でも暖かく風通しの良い場所に自由に移動させることができます。また、お尻の下にコケなどを敷いて「おむつ」とする工夫があること、子どもが悪霊にとりつかれないようにお守りを付けるなどの共通性もあります。

詳細は、展示室に用意している解説シートでも紹介しています。他にも4種類のシートがありますので、ご利用ください。（学芸課 齋藤玲子）

執筆者ならびに出版社から 贈呈を受けた書籍 (12月～1月)

遠藤 史『ユカギール語文法概説』北海道大学文学部言語学研究室 1993
佐々木高明『日本文化の基層を探る』日本放送出版協会 1993
バリー・ロベス著 石田善彦訳『極北の夢』草思社 1993
北海道口承文芸研究会編集・発行『北の語り』1994

主な来館者

12/ 8 C. ミュラー氏 (ベルリン国立民族学博物館)
1/23 林道義氏 (東京女子大学教授)
他 1 名

観覧者動向 12月～1月

	常 設 展 示
12月	810名
1月	1,231名

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (12月～1月)

12/ 8 小清水町教育委員会が手作りの郷土資料館を整備中。ボランティアの協力で1200点収集。アイヌ民族資料も/Y
12/ 8 「ハルニレのうた・アイヌ民族と教育・第3部・隣人として」16日まで7回シリーズ/D(タ)
12/10 余市町大川遺跡で大量の「トンボ玉」出土。14世紀ごろのアイヌ民族のものとみられる墓から/D
12/10 旭川市博物館の魚井さんによるアイヌ語辞典編集進む・語源やアクセントも付けて/A S

12/11 根室市博物館準備室・川上学芸員「クナシリ・メナシの戦い」本に。市教委で出版予定/A S
12/ 8 道東アイヌ語辞典を完成。釧路営林署職員西島さん・手書きで12,500語収録/D(タ)
12/31 映像を軸にアイヌ民族の全国的ネットワークを。京都在住のチユプチセコルさんが計画/D
1/21 北見市の北方歴史美術館で、蠣崎波響の「名鷹図」、平沢屏山「蝦夷神祭図」など公開/Y
1/28 帯広百年記念館常設展示室・模様替えし、オープン。先住民民族コーナーなど充実/M

* A S 朝日新聞 (道東北網版)

D 北海道新聞 (オホーツク版)

M 毎日新聞 (道東道北版)

Y 読売新聞 (北網版)

複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。



その他の主な行事

12/11 小中学生のための博物館講座 (第2土曜日開講)「たんけん北方民族博物館!」では、マジック・ビジョンの裏側を見て、しくみを探りました (上写真)。
12/28 ロビーコンサート '93「青少年のための室内楽の夕べ」開催。

服部登喜子氏 逝去

ニブフ語等の研究で業績を残された故服部健氏の夫人・登喜子氏が、去る1月11日に逝去されました。

同氏には、昨年当館に服部健氏の遺品である書籍・ノート類・録音テープ・民族資料などを寄贈していただきました。寄贈資料につきましては、多数に及ぶため、整理を進めているところででした。ご生前のご厚情に深く感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

流水の動きとともに、全国ニュースでも「網走」の名が連日伝えられる。遅く来て遅くまで居すわった昨年とは違って、今年は順調にオホーツク海を南下し、沿岸を埋めつくしているらしい。地元の人は、流水が「いる」とか「いなくなった」と言うのである。

大陸やサハリンから流水に乗って、人びとが北海道に渡ってきたのではないかと、ロマンをこめて言う人もある。それが真実でないにしろ、北からの訪問者を迎える玄関口だということを実感する季節である。

中央に集中しがちな情報社会のなかで、この北からのたよりは「珍しさ」ではなく、地域や自然に根差したものとしての「文化」を発信し続けたい。(齋藤)